春臺揭語

全

全

別12
34

国立国会図書館　タイトル『独語』 請求記号 本別12-34

ガラス使用

獨語春臺著

此書は山東庵の手澤本にして左の題簽は京傳筆
其裏の目次と巻中四十二丁の書入とは京山筆なり巻末
に以細井貞雄藏本書寫畢云々とあるは京傳の筆にして
裏表紙見返しに貼せる二紙は京山の筆なり
附記著者太宰春臺は延享四年五月晦日歿享年
六十八谷中天眼寺に葬る

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

獨語　春葊著

帝国図書館

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34

ガラス使用

目次

○和歌 并 詩
○茶の陽
○俳諧 并 連歌 聯句
○淨瑠璃 并 三味線 琴
○猿楽 并 幸若 田楽
○俳優 并 江戸の風俗
○男女風俗の変格

臣

獨語

いひしきをいひぬ後ふくるつきなりと昔の人へ[illegible]
は誠なりされはとて思ふをいふべき人に向ひ祢ばゐいぞ
いたねは今も後ふくるぬまぐ只そゝむきて[illegible]ごち
ちて後をすうをより外の事那し

○世に和歌をぬむ人お[illegible]も和歌のそこを知れる
人にそなけまき三十一字をつゝぬる人はおかけまきとも[illegible]
集古今集に入無きなどの歌をのこいしまて人をいまさ
きうは[illegible]又毋(ゆしそく)とも和歌をこのこしあに八九葉の比より

好文堂

三十一字をつゞぬるすべを知り十策だろりより十二三まで
みこしおきのうゝ凡三四百首もよゝとり師もなく
友もなかりまゝば歌よゝたまゝばとて人にみんするとも形く
書つけて花(カリ)し置と海乃ゝなり其時乃心に歌いよゝ
すべきものとのゝおもへり十四人策の時始て詩といふ幾
まで歌びて稍(シヤウ)こ七言絶句なるべを綴(ツヾ)るすへを知り其時五(グ)
ん言そうに思惟(シユイ)せしハ和歌をまなひで縦(タトヒ)上手にあらた
りとも公家(クゲ)の人こを超(コエ)るゝとなる海ゞられば いつも公家乃
下にかゞゝ無んもくちあし詩ハ公家の政(マツリゴト)をうくまゞけ

れば上手にさへなり歌ハ公家をも弟子にすべし此道にたき
てハ己下に畏(オソ)るゝ心あるまゞ いざうくよむことを屋ゝて
詩作ることを習ハだやと思ひ定て出つけ置たる和歌の反(ホ)
故(グ)をもゞ多く賛(ヤキ)すてて一首ものこしとゞめ其それより詩を
始くおこすゝ学習(ガクシフ)し二十年を経(ヘ)てようやく詩の
そこを明らかんとり己性(テンセイ)不ゆるなる故に上手にハ始あらず稀ども
詩のそこを学ん惜しくるゝは誰にもまけじとぞ思ふ此そこを以
て考ふまゞは和歌のそこもあきらかに知らず凡唐土と
家国と風俗同じからずと以ども詩と歌のそこをとり其

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

理全く同じ其事細ハ異國も家國も古も今も人情(ニンジヤウ)ハ
あらざ事ハ詩も歌も人の聲にて性情(セイジヤウ)を吟詠(ギンエイ)する物なり
まバ唐(カラ)と大和(ヤマト)と詞のかゝるのゝまて性情を吟詠するとハ
かもかゝることなし詩ト歌と其あもむき乃同じきハ此故なり
然るに異國も家國も人の詞ハ時世につまてかゝる故に詩も
歌も時世にしたがひて風雅かゝるなりされバ詩も歌も其の
世にありて昔にあらるは風雅乃かゝりにて風雅のかゝ
りハ其詞のかゝるなり此理を覚悟してよく古にさらのぞ
りて古の風雅をかんがへ古の詞を活用れバ今の人にても

古の人に異(コト)ならぬ格にあるべし歌ハ詩のそこかくのやし此理を
以てあしたらまバ和歌のそこそ亦かくのやくるべし歌
和歌を覚ばれども詩のそこを以てかんがふるに今の世に居て
古におとらぬ歌をよく出すべきことハさのゝ難さるにあ
らじ詩をアんなに服にて歌をアんれバ歌の位も後もあきらか
にアんゝアく形り異集乃歌ハ風雅(ガ)より漢魏(カンギ)の古詩ま
てを兼ゝ稍(シヤウ)く悪(セイ)唐(タウ)の詩をこしらぬるものなり古今
集の歌ハ正(マサ)しく悪唐の詩なり後撰拾遺の二集ハ悪
唐に初唐(シヨタウ)の詩をまじへたるものゝ後拾遺より新

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

古今までは中唐晩唐の詩は宋の詩をまゝへるものゝ
新物撰より志もつゝるはいふに足られ和漢此時代をかん
うふ家は東國元正聖武孝謙乃御宇正しく唐の玄
宗の開元天寶乃時は當るに其所信の仲麿吉備
公の如き人に入唐して集唐の禮樂文章を學びか
へりて東國に弘めし故に東國の歌も自然に唐詩の
風體に似たり仲麿が明州にてよゝしたりといふあをら
歌ばしの歌は集唐の詩の佳境にて李太白が峨眉山
月の詩と同格なるへし定家卿あ詩のたゝしと改られ

しはくちなし植武平城嵯峨の時に及ては唐の大曆
以後中唐の世にあたりて唐詩は格調すこしくて足ぬ
もとも東國の歌は稚さりあり白樂天が詩は唐詩の
極悪道なるを白氏文集東國にたこなれて菅丞相
を歌ひぐこれを好きたまひ名とやそれより公家の人に皆
采てこが詩をあも三家きるに思ひてこ風調を和歌に
稱されしほどに至るの歌は三代集乃體をうしなり
又源平の乱の時美國は宋の代にて程氏朱氏の道學
興り詩のそこなとうふ東國にも俊成定家の歌道おこ

四

ふれて萬葉古今集の風體舞(オトロク)きり後宋の天台の
仏法をまねびて一心三観の理を歌道乃極意とせられ
とり其子宣家も志を家訓(カクン)を受くまし故にやよく出
さるゝ皆理密(リクツ)にてくゞしきことたわかり萬國も
家國も同時に詩歌のそと舞ふるを誅に筆運(キウン)此能く
志むる深く出しきことあり凡家國の歌ハ定家ハより舞
とりとれもふ為家卿ハ又定家卿よりもたゞれるよし
然るを其後の人系極家の教を学伝して今の世までも
聞くなり金科(キン)玉條(ギヤクゼウ)とすゝ詠うるをくちれしきと歌

其此一大厄(ヤク)といふ事し今の人歌をよむ事ハ必ず
家の中の名家なる人を師として学ぶ是大なる促(アヤマリ)なり
古より想して位なるき人に物の上手ハ無きものにて上手ハ
いかも賤き者に出来るなり歌の道にても人麿赤人
は貴人にあらずして古今集を撰ひたる人にも友則一人
大内記にて又位の友人なり貴人之ハ又其下(シモ)とぞ弱
恒ハ甲斐の目(サクロン)忠岑ハ名清門の府生(フシヤウ)なれハ皆地下の
賤き者ども取り此業皆歌道に達せし故に撰集の
物を受くり歌の雲(サカリ)なるまし時ぐに高位の人にハ達せ

五

稱(ニレ)なり況や今の世歌そこ蕘(スイ)術(ビ)の時は公家の高位の人
如何として上手ある歴きや家は眼なきなれは公家の名家
にて歌所と定らきたる人をば必ず上手ぞとおもひく是(ニシ)點(サリ)削
拙(ヒ)歌(ハン)を知るは淡ましきなり然れども名利は如し
きれまてみまれを当時はとりんと思ふより公家の名家の
稱義(シヨリ)を得て世にみこしんと計(ハカ)るなり思ふことはおもふは
歌道は師につきて学ぶには及ぶまじ但和歌の事は傳授
あくては讀がしき物なるまじ其事ところえたる人は志て
がひて書をばよそ看ふ歴し既に事を讀みなひたる

上は萬葉集より三代集までをくりかへし手遍讀なばお
同ぐこそしんずべし詞をそらんじて好多諷詠すまば
自然は風調をも悟るなり其事は古人詩家の歌
学の事をよまば法をも知るべし其上にては花をみん
月は萬しく人情(ニシ)(ジヤウ)(キヨウ)(カン)其儀乃ちある時自然に三十一字
を法に称出すべし是(モコト)の和歌にて上代の人の歌は皆
此境(サカイ)はいたりてよそ出したるものなり上代の人は自然の
風俗にて歌をよむ故に師は学びたる人を取し
法まば志づ乃在志所のめも皆よく歌をよむ事は世

六

古風俗うつりかはり人の詞も古ほおよび故ほ人の人は
必ず代集より上つかの影をいめ子そこんじた家
にて好き影をばよしうへしさらくよしこ家影を必人は
みんまべし也ゝみもあらぬ海しこ公家此人こにみんせて
稱美をはゝ名（メイヨ）誉我求むべきもあらすいろん
みらく筆為も玩味（グワンミ）諷詠し古影は引くらべて生似こ
かと似ざるとの事を思量（シリヤウ）せば何ぞよしかしのみこ
さることあらんやかくのぬくにして影数（ウヌカズ）あ同くよまば生
中は一首二首古人はたらぬうたなるらん身の一

生はすぎまとうるうて一二首ありて人にも稱せられば
不朽（フキウ）はたりぬべし素撰法何ぞ己が人の影にて名を子
孫に遺し為るをみんぞしきりなるら当時の人は知ら
まんと我もとゝみんぞよしこ幸るなどの影を生ましたるし家
知りたる人もとりふるとにも道しれきゐらんに当時を
とりたやす人なくとも百年此後に貫え別恒なる人あ
らば必ずあるべき形り其人の清（トリカウ）も才藝（サイケイ）も当
時にて知る人なくて身の後に世上の論さぞまりて伝
ずる人も不知る人も何るものなり然るを其の一生の

七

内に人に知られんとする故にきて形き人おこりて大事
をあやまた事是その志れ言るうちぬなり昔廣仲翔（グナウシャウ）いと
下に一人家を知る人あまたは昭こざるに只りぬといひ老子
は家を知る者まれるまゝ家たうとしといへり此後に
てらばわまきを当時にもとむる人屋こぬべし和歌のそこの
こに昭らば第の事皆これに同じ見れ詩のそこを以て推（オシ）
て歌のそこを知れ家とかくの如し詩は墨画の例なり
歌は家画志詞なり詩にくらぶまゝば甚屋すきるなり
学び格乃何しきと志を立家この言うちぬまて古の

志が山がれにもたよびぬはいとくちたしきる所にすぎや
居友邦教文遷は和歌のそこを知りて後に詩を学
び詩のそこを悟りて遂（ツイ）に上の名（ヲ）得ちうけまゝば今
公家の人こにはこの少年のいふ侍のそこをとき学
せらくたもふなり此そこを学ぶ悟を開きつの少年
の詩をまねぶ如くに和歌を学びたまひ花古今
たよだるべしさもなしぞたかくの人乃中に傑出（ケツシユツ）の人
などう出来らざらん今公家の人こ和歌のそこをた
にかんぞ屋まゝこを思ひぞしてこ百年来家

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

卿の教をまゝわりてそのおとろへゆくことを知らず
いたりてなけらしきを取り今の土庶人ゆゑ
此説を伝(シン)受(シユ)して詩をまゝ取ぶそれを以て和歌を
学び一己(イツユ)の精力(セイリヨク)にて歌をとを悟り上代の歌に
似るだけの歌をよくこれをまゝ学んにあの後に
知(ケイ)るありて必ずあぐべし生所此ころに師(シ)
範(ハン)なく公家の人にまゝ取ぶ所自力にてよくこと
りとてやしめまゝ法とは有ましに能なり陽
春白雪の曲(キヨク)は和(ワ)する者甚く而し知音の

士みあらざまでこれを賞することなし今の人をたゞ
下里巴人(カリハシン)の曲をうたひらく和する者のお同きをなす
れとするなりけり
○ワク先(セン)河(シ)徂来先生曰美國と和國と風俗大ひ至
取る中に唯詩と歌このそこだけり詞の異(コト)るのこと
て先おもむき全く同じ人情おなじきなり又曰
和歌は人麿赤人乃外在原の業(ナリ)平(ヒラ)を上手とふべし
伊勢物語に載るうた絶妙なるたゞし月座何
らぬれ歌をみん法に何等の感慨ぞや法ぬにゆゑれ

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

歌は古今乃辭世の絶唱なり惟なるの皇子をも
ふくひまいく勢て已すまでは夢かと我を思ふとよ
まれしは歌のまぎれたる乃ことはあらんぞ節義の人詞の
和にあるとぞいはれし

○毛詩に蕭に馬鳴悠に旆旌といふは軍中の路なる
状をいへり蕭のいるるをきて旆乃風に乱れ
をみるのことにて他はいふ所きるを風雲を
出あるにて以其をせり柳に詞に嫋にいふ秋風洞
庭波にて木葉下といへるは秋風そよくと嫋く

時洞庭湖に波たち湖邊乃木の葉ちらくと落ち
といふ為ろ乃ことにて和みめづらしきるをもちかし
きるもろし秋もどもはるを此詠すれば洞
庭の秋のはしきくらも同意にてつくり様に
おもひ侍又王孫遊兮不歸春草生兮萋とといへ
るは人をなりうしむ人跡なき感慨なるは此等の
佳境にて和歌も亦此意なり古の好き歌といふは一こび
きけばすぬいち耳にとまりて忘れ其意も人の
解説(カイセツ)をまつらずして知らぬかりそめに吟ずる時は此の

これらしきこそ形き様まで諷詠玩味すまじ沿なき
奥致(キヨウチ)あり今乃人の影は詞むつかしくて再二雪てこそ
耳をるまじ守れつち言家人の解説残雪てこそ
意通しがたし影此よきなきこそ見まてこそ知るべし
古人の詩は必実境(ジツキヤウ)に異(タイ)し実事なりて湯(ニン)
奥(キヤウ)より出る故に無意実なり浮世の詩は影をも
もふけて作る故に無意れば虚(キヨ)偽(ギ)なり是を無(ム)
病呻吟(ビヤウシン)といふ呻吟はおめくなり和影も古の人皆
実にしてこよめり浮世を影を設てこよむ故に古人は

虚偽此詞なり志らくしたしけとる頼の月うけぬ雪
ふこまけて梅の花たるといふ影しそいとこ田口まで実
境に異してこよめる影は望かくの如く繚(ワヅカ)にとなへ出せず
なつち無時のる恵像(サウザウ)せしる和影の如なり見地をうごと
思神を生(カン)せしむるこ此境にあり今のうたは志ろうだ
○近き世に人のもてあそぶ茶のそこそいとんなぬこ如き
黒(ウツハモノ)を鳥(フル)きをもとむるに何らだ新しきをすゝと尚(シヤウ)
生(ミヨ)にいふるに今の茶人は飲(イクトセ)年を経るとも志を(レ)ぬ鳥
き茶碗の汚穢(ヨヱ)不浄(フジヤウ)にして志をもかけ横じたるを徐(ウルシ)なきまて

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

碧(ツクロ)ひくもちふ事がらはしけいふきり明し紀羅國
の人の者は用ゆる唾壺(グコ)(ハイフキ)の事こさを取て抹茶(ニツチヤ)を貯(タツハ)へ
これを茶いれといふ是けがらはし竹篦(チクヘイ)(タケヘラ)を攪(タメ)て匙(カヒ)とし
て茶を抹(スク)ふ是を茶杓といふ人は茶をのまするあはまづ
かこひとて一間なる狭(せい)キ所に集りてくひものも人にはそれを
るとなくまづらもりくひ酒もこづらへて乃こそまうつ
いものをもまづらし洗ひ拭ひて徹(テツ)を點(テン)んくひて後出さに
すぐさ入家あはじこげ事ら茶を點じて家人にたてまつ
きが一ツの茶碗に點じたる茶を上座の人にすこし飲こ後の

人は傳ふ三人にてこの人にてこの後にのこて米座なる人の
こりなく飲てその茶碗を上座に接(サツ)く上座乃人飲てふ
細につんて弥器なるこ我嚢(ホウ)こ又浅(ミザ)座の人は傳ふ浅座の
人こそ子細につんて後者に法ふへらく末座にあるに末座の人
つんれつりて呵るしにかへし家人一回に謝詞(シヤジ)をいたして
頓首すれば茶碗の袋をこひつんれば茶いまをつんれば
茶いまの袋をつんれば茶杓をつんるこるべきなどの弥器に向
しされともこひてつんるを袋とは爐(ロ)に茶を打くも又細
ありぬこ以きがあ海じの茶を打くをが家人さしよりて

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

起りを得るは漢云にては南北朝の比より茶をのむこと始まりといふ唐の代にいたりて世に茶を行ひ盧仝陸羽を頼ひ茶を好めり盧仝は茶の影を作り陸羽は茶經をつくりけり其時の茶は或は熱湯に淪し或は熱湯に點じて飲む是今の茶人のもちふる茶なり或は細末乃茶を丸となし是も熱湯に點じて飲む點茶には茶筅を用ふこと今の人のするこぎの如し陸羽等が茶を煎し或は淪すには水をえらぶと甚し詳なることは茶經にみえたり陸羽等が茶をもてあそびしありさまは今の世の茶人に似たり陸羽の同時に常伯熊といふ人も茶を嗜く茶のそこに精しかりけり本に卿といふ人丞相李適之が子にて兵部侍郎史大夫乃官なりしが天子の使をうけ為まいりて江南の方に往き臨懷縣といふ處の旅館に着しに或人常伯熊が茶のそこに達せること能いひしかば屋うて伯熊を抱殼に請して茶をれてなり給ひ其時伯熊黄なる衣に黒き紗の帽子をきたりに茶器を持ちにに茶乃名をとなへ祿へど祿に用ひてして法のぬく

十四

茶を茶まで偶(カタハラ)にてゐるもの目のごとくて奇(キ)異(イ)の思ひをなせり
茶ゆゑ口れば季卿二盃すゝまてやゝぬそれより江都と
いふ所にいりて又陸羽を請じて茶を行せけるに陸羽
野服(ヤフク)を着(キ)て茶具をしたゝめたてゆきけるその作法をじく見
伯熊にたなじ季卿茶をは飲ひれども此人ともに志るまぎを
みるくいやしきことと思ひ口れば従者に命じて錢三十文を
陸羽にあたひしも陸羽大にたちくやゝて見ゝより茶をも
てあそふこと我屋めらく数(キ)茶論(サロン)を著しけるとかや家國に
ては編舎の時の山の禅僧翼國より茶を持来りて弘め

しが世の人さのこともてはやはしもなりしに室町の公方義
政こまをゆゑたまひ新茶にこれを玩び東山の慈照院の御
園にて茶の會をしたゞくなりしとも義政は天性奢侈(シヤシ)を
ゆゑたまひしかに茶をもてあそぶるにも茶堂より茶具に
いたるまで必然(ケンチ)緻(チ)にて美麗(ビレイ)なることを好ゑたまへり今の
世の茶人のみくに所にて東山殿の調度(チヤウド)とて今に備はれる
をつんるべし近き世の茶人は利休居士を祖師とし利休は猶
男の禅門にて鳥賊なるが茶乃庭(イホリ)のせぶ祖閑にて茶をたのし
ミける我当時の諸侯富貴のたのしミにあきて利休が貧(ヒン)

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

時宴（セン）暖（カン）のたのしみをしるひ大廈高堂をさけらく一間なる
泥をしつらひ千円をてゝまづらゝ菓を熟して人に乃ま勢て
たのしみ日り本相ゆゑ禅門のまづしきを屋川くしき者の
楽しみをまゝ称びしる故に一間の作りより始ても詠くのら
つゐものにあるまで皆あらくし紀物もちふくひものも美
膳をきらひて潔（ヒ）泊（ハク）なる物を好む凡菓人のなまとゆぎをぐ
く貧時なる者のまゝ称びなるされとも富貴なる人は貧
賤なる者をまゝ称びてたのしみとすることいとれあり元より
貧賤なる者何ぞ更に貧賤のとぎをまゝ称ひてたのしむ

をあらんや今の世に富貴なる人たのが好む心より貧賤
なる者を菓に請するは心得ぬるなるに凡よろ川の黒の中に
翻くて善さ物は楽黒（ガクキ）なり昔の工夫作りこゝおゆくの
年を悪（へ）るは必好（タイ）なる所出らくあやしきるも何ゝ故に楽
黒はかゝ翻きを変ちとす楽黒の外は大かた何の黒也ん翻
きをあらはしきに志くことなし中に法きてのこゝくひの黒は
いかにも新きを悦ぶと誰も同じ心なり菓具の中にて
巻だりこそ翻きをもちふべれ菓碗はいかにも新きを
もちふ屋き物なるに我年を練るとも知れざ何人の口の

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

垢(アカ)やらんそこてけがまし為志うもかけ換しとるを法く
ろひてけがらはしともおもはてもちふるはそもいう形るんぞや
昔物光(ヤクウ)の璧(ヘキ)といひし玉は物る車十二乗を照し日る故に
世に稀なる寶とて十五の珠にかへり明月の珠といふは
物をてらしを明月の如くなるしとうやかやうれまるれ
たる法ある物を寶として多くのあらひにかへるはさもなる無
きる物り古典古典疎るるを寶とするも其言無の
たくこの世にすぐれたる事をもてあそび旦(カツ)を今乃人の
生日法を学ぶ者此法則となるをたうともなるに日ある人は

金錢を取しまゝぞ生かりを出してこれをおもふはける
事に何らぞ今の世の業をもしくあそぶ人は何の珠しきるも
なくすぐれたる法もなきを此磁以志を千金万金に賣れて
上もなき寶と在もひさせるこそも物をき人の能きる竹の筒
升の篦(ヘラ)なりとを百金あるを賞て世にめづらしき物と相ふ
大なる蔥(マドヒ)なり近き世に業のそこを弘めし人は利休家且
等ぞ外には片桐石見守貞昌小堀左を等政一なり此今は
貴賤業なれとも皆聖賢に何らぞ此の人なるに今の業人なる
此今の志をさをまゝ伝びて是も利休の法是は左衛の法是は石

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

おの法とて稽法をまなる如く一向に望くやりてかもんぬがハド
とせかくさらいくきる形り今うまてもなまと世にいきゐひ
ある人茶をもてあそび先生まにかけりうくあそうしきわ
ざをしいぐさんにくとする人あまたありてまかしこまて
生ちゐるぎをまの称びてせが無ぐて一流となるへし是茶の
そこに一宮の法なきなり家もまた茶をたしむなま
人の許まて美猪などくひゝる後に上京の抹茶を濃く
點じて出さるれば口にかなひて甚快し但それも廣き所愛
まてくひものをんに住せてくひ酒も人にくまれてのゝ點心を

よく合はて茶をも新き茶碗にてはうふる者の點じたる
をんこいのなる茶碗にて飲むはよし今の世の茶のそこを極
ていとはしきるぎなり茶を貯ふるを此方の磁器をもさるべ
き物あるさもなくを茶（ナツメ）の形なる漆器（シツキ）よし銀器（ギンキ）錫器（セキキ）
もよし茶を掬（スク）ふには銀の茶匙（サジ）をもちゐ屈し茶碗はい
かにも新紀をもちゐるいさぎよく快由俳諧は和歌の一體（イツテイ）之
古今集にはんゝたり史記の滑稽（コツケイ）傳の語に姫君（ヤウサツ）ぶが説を載
て滑稽を俳諧のどしといふ事俳諧とはたはふまてと我いひて
人を悦ぶ勢人の心にかなふをいふなり古今集には俳の字を

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

誹(ニ)は俳まり誹の字は謗(ハウ)の字と法々称て誹謗(ハウ)はそし法義
なるを俳の字にかへてもちゐることいふなるといふと我知法
誹の字と俳の字と音も義も大に異なるをかよはしもちゐること
字書にアんゝまて恐しくは古今集の誤なるらん古今集に載る
俳諧の歌を只法々のうゝこの如く詞をこし者にかれ歌乃こ
なりかりそめにアんまばは只法称乃うゝことアんゆくはし日ゝまゝなど
されば俳諧のすがゝを知りがゝし連歌といふを中古よりたゞ
まりて末の世に成てなりその本は三十一字の歌を二ツに分て二人
してとなふ事なりたとへは近衛院の御前にて宇治の左大臣の

とゝぎす名をもたゝねにあるゝのれとのゝまひしに粗略を
たり月のいふにまかせてとゞまされしなど是連歌なり此事は上
代より有しかども連歌といはれ後の世におよびて上の句下の句
をいくゝもつゝ称て長くいひのゝふとになりて連歌といふ名
出きたれり中篇に聯句(レンク)といふとありて又云乃句を一人二句ツ作り
人あまたにて数十百句もつゝぬるなり此國乃連歌はかの聯句に
倣(ナラ)へる物とアんゆ連歌は和歌のゝぬぐひなるなに歌人もこれをきてゝ
いぞ後におよびて連歌師といふ者出きてさ高ぐの式法を立て遂(ツイ)に
世のもてあそびとなまり近き世におよびて又今の俳諧といふと

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

出きていぬしきたりゆきことを法ぐりて連歌の如くもてつゝ称て
もてゆそひとすゝ法ハ俳諧の連歌なり生ゆ連歌師ともがゝ
連歌の句にたゝふまどの連歌にハいひがゝきなどのるを一句
二句法ゝ称ゝ見ゝひ無じまるを千ほ俳諧師といふ者出きて
是を専にすることにあまり自ハ法宗因芭蕉翁などいふ者是なり
されど自ハ法等が時の俳諧ハ戯(タハフレ)ごと我たゞしくいひあしてうちまく
ものこゝにまぞ見ゝひ無ずるのゝあり芭蕉翁までハ猶その跡に
まきそれよりくだ見てハ記すゝたゞしきことをいたんとて下部の
このまてもうち守てよ称こゝ様あることをいふ様ていぬしきことを

きてゝハ祝子兄弟の中にていひがゝきにくきるをいふ事俳諧
の中にてもいゝ見てくまる事なり志れども六十年の前に歌
仙とて三十六句を法ゝ称或ハ六十韻百韻とて連歌のごとくつゝ称て宗
匠の跡をそゝ俗劣を何ゝそひあ(ゝ)のゝなましに元禄の
初乃比より前句附といふものおこれり其法宗匠より下の句を
一句出しゝ者おくの人に上の句を附させて跡に第一第二の事を
敍(メイ)じて甲乙此次第に志ゝがひて賞をおこなふ其賞ハ或ハ
布帛或ハ器物などそこだくの直(アタヒ)なる物を出せて布帛器物を
望なき者ハその直なる金銀をこゝろ賞を得んとて半賤

とあく家もくと句を附て日ごに距縄をつい屋す是を和ちち
博奕の類なり此ゆゑ先ほ以ゆまこく世の俗人皆これを好む
ゆゑに下の句に上の句を附ルも好むつかしとて家道より上の句
此物多くもじを出しこれの七もじ多もじを読人に附さまる
るになるまり是を冠つけとも笠づけともいふかくやうきわ
ざにあつまぬまば下部のこゝろはけまそそ俳諧といふるを
知りて笠附して保美とくんとするゆゑに詞いよくやりく
あまつまゝ寛永の比より冠の多もじ或三ッ出して三ッの冠に
各七もじを附させて猶負をこ人家と云り是を三笠

附といふ是いよく博奕に通して此ゆゑもじの冠をも出さず
下の七もじ多もじ乃詞をも屋ゆんて只数の文字を封して
和より此数をたゞりて和をいれて此数乃あくまゝ猶を猶と
して金銭をとしまゝ家をなりぬてこりしまりて八正しく
博奕あれとも本の名を存して此三笠附といふ此三笠附
変になりて勝き者ハいふに及ばず土君子もこれをなして
得つゝんとするゆゑに得ハ法ばして御ゆくの賊をついやし
身を無ひ家を亡せ者数を志しば此ゆゑ上ゆきこえて享
保の初よりまびしく三笠附を拂ふせしゆゑ拂ふを枕して

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

刑四討にあふ者隔まども今にいたるまでなたんずと沙ゆ
和歌の流(ナガレ)その末変(ヘン)じて十弃となるべしとは住吉玉葛
の神もいかで志ろしめさん浅ましく少し程は俳諧の見
ざりひなしずや凡昔より戯によらる歌又時の人を咏(アザケリ)
笑ふる狂歌のみぞひ古き物語等紙に記したきとるはこれ
俳諧なり志れども古き狂歌は詞いやしかしばきてあきこと
をいはれ又子ひ弟の中にてとかふ事にいきこかさること那し近き
世に江戸の雪師と苔といひし者狂歌にたくしなりしも世に
諺乃なりまてうるるともを戯にいひうちへてたのしきことおほき

のこゝあらく詞いやしかしすなきて程さてうちまはれくて
しれ狂俳諧歌のたるひあるべきうしじろの俳諧といふものにはま
さるべし寛永五年の春京都大学にて内裏炎上し公卿
殿上人の第宅のこりすくなく焼ふ勢当りしに清水谷の
大納言実業卿風早の衆議公長卿も火にあひてこゝかしこに
げまどひたまひけるが二人そこにて行あはましに実業卿
風早ときくもれそ詠しけふの火や
と乃たまひければ公長卿とりあへず
清水谷とて屋けも乃こゝば　とこゝへまゝまひとゝやこ

れらをしそ先の俳諧といふ所はまた和歌のそと兼ことも云
歌の人とは粗ヶ根乃屋さしきたりまた何事は此比の俳諧といふ物は
さのことにひ無ずるほどのたらしきことを望ば連歌の詞に似て
連歌にもあらぬ意ありいかにもたりがたしさしよりうへ此
人にとひ志まは俳諧は古今集にいんしらく和歌乃一
體なるよし御口に藉き見の大和の歌をさるを引く
此そとをたうとくまて志られしとも此句を出つけるをつんまば何
屋しんえもいまきぬるをえもたしまぬ文字にてたるしても
の志まは抜なりし俳諧の草紙きはめてまぢちまき物なり俳

諧師といふ者極て賤き者にて諸侯貴人乃もてあそびも
のにあるなれは屋んとに紀人とは押辺づきてさ面ぐのよう
らぬるをまとゑんまいしまるたぐひ世にたゞし士君子の友
とすべき者に何しぞ心あらん人はきびしき柿ふぞべきるなり
近き此は諸侯貴人もおわくこれを好むことになりよろし
ぬ風俗なりいたく俳諧をこのむ人によきをいまのごとさば
◎今の世淫楽たるき中に孫弁のたぐひには三線（サニセン）らしふ物
のゑめぐひには淨瑠璃に至る淫聲なし三線は琉球國の楽
器なるを其の出此とやらん此國に傳べしといふ音晋（シン）の琉咸（ゲンカン）か

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

造りし樂器を玩戯といふ世國に傳ひて昔はもとあそびなる
まや延喜式に載たり今の三線は玩戯の遺制なりといふは
いかゞあらんの玩戯はいのなる制にて有りん今此三線は甚しきく
淫聲なり千法くり琵琶り似たる様にて琵琶にくらぶまゞ
形も形はいやしく是を彈ぞ其滿を称てこゞろし此聲繼
に發すれば傳に人淫心を引起して放僻邪侈に至らしむ是
害いふもつまなし士君子乃僻にもきく屬き物にあらぞ淨瑠璃
といふ物も三線と同じ此に始まりと呼ゆふ明王氏の女三河の
國矢作北宿乃長者の女淨瑠璃といひし者のるを十二歌(ダン)の

の昔物語に作りしを千法の目くらし法師これにふしを付て
語り出せしとうや後の人是にならいで色々此昔物語を彼
類に作りてもてあそぶ本淨瑠璃が事を演せしより始まる
故に敷(スベ)て生名を淨瑠璃といふ三線乃聲これによく叶ふ故
淨瑠璃に必三線をあはすて世俗の上にもきもてあそびと
なまり後家に寛文延寶乃比まで此淨瑠璃は皆昔物語
を演せし故に詞屋さしく微にしてあはれにたゞしきるも
今のうり淫聲といひながら忠臣孝子義士節婦のるをいつまぐ
愚なる小人女子もこれを呼ては此ぐしあつも元服の比より

廿四

稍まさく俗に近くなりて淫靡の都督し京都の比京の
淨瑠璃師江戸に来りて鄙俚(ヒリ)猥褻(ワイセツ)なる淨瑠璃を唱しより
江戸乃人これ面白きこと思ひもて奥じ居るに享保の初に又
難波の淨瑠璃師来りてかなるなる俗調を弘めしなどに江
戸の人いよくこれを好みて江戸の手前き淨瑠璃を捨てしまふ
に京難波の淨瑠璃をなるに時き者乃ゑあらん土太夫法庭に
でもこれを好みて一ふしをまなぶ人ありこゝにいたりて芳物語を
捨てたゞ今の世は賤き者の淫奔せしるを語る生調の鄙俚
猥褻なるといふとうり如し土太夫のきくへきなるに何しざるをいふ

まおよびは親子兄弟なるゝ淫にては面(オモテ)をそむけ耳(ミミ)を枕
なふ風きなりされは此淨瑠璃を聞てし行はまてこゝりこの
うゝ江戸の男女淫奔なるは所をしらずは元文の年に及ぶは
土太夫乃族いふにおよびは貴き友人の中にも人の女に通じ
或は妻をぬすまれ親族の中にてぬぬ通するたゞひいくこと
いふ所をしらずは是正しく淫楽の禍なり三線も寛文延寶
の比までは調子をもつて記しかゝるものゞしにて筑紫(ツクシ)箏(ゴト)に類(ルイ)せり
うゝふ影も調やさしくふしもゆるやうゆゑく俗調といひ
なぞらやしけまて非うり起近き此は調子なるくもくまゝ甚せゆしく

廿五

こまるまなりうたふ影も詞いやしく拍子はぐまりていそがはしさ
いふまでもなし淫娃の至極人乃心を傷ること是にまゐる者なし
凡雅楽は拍子まことをまて線行（イトタケ）ともよく口を使（ツカ）ふことまのぐらしあり
雅楽とは正楽をいふ淫楽は頻（ハン）手（ニユ）とてく口を整ふくまて今の三線
牧笛二人八一節（ヒトヨ）斷（キリ）皆頻くなり中にも三線の如くたぐふべき物
なし筆は雅楽の思ふなるが箜篌筆にまりて俗楽に蔵ぬ
まぐも手数本雅音なるまはいたく人の心をとらうさぞ今の
人雅楽を学ふことのたぐもせめて箜篌筆をもてあそぐ
程かようるべし牧笛二人八一節斷は俗楽にて如くまれども三

線乃めくの淫聲にならば凡俗楽はあらゆる楽器の中に三
線ほどの淫聲なし古の鄭聲は如何なる聲にてうたけん
孔子の鄭聲をとてとのたまひしは雅楽を妨げ風俗を
屋ぶるなり世に雅楽ありうるも鄭衛の淫聲を棟ぜざ
れは雅楽行はまかたし今の世には雅楽絶えくなくして淫楽
乃ち幾ばおこなるまで風俗の善敗まることはなはだ速なり
赤國の古を考ふるに物をしより民間にいたるまで雅楽のこと
にて淫楽なりしとつんぬ中古より白拍子今相なぞいふも
の皆しらども白拍子は今の大頭の義その名称なるんと思ふ

廿六

妓舞なまぐも古風当のこれり今相ハ[illegible]びにこれど一ツ二ツ遣り
て人のうたふをきくに古雅のあもむき今の世にハ[illegible]物
あし此かに淫楽といふべきものなしことをきくにされハ俗説ゆ
いふ三河国矢作の宿の長者の女浄瑠璃が侍婢をあつかへて笑
弦せしハ賤き者のかのもてあそび相なりかしなる雅楽を奏し
て法まぐをなくはんなり又平ノ重衡とらはまて関東にゆり
し時旅寓の法まぐをなくさらんとて殿河国ノ義の妓ぶ子寿
を垂りしに主衛理琵琶を知れしかバハ寿筆をひきて六夢
楽皇鹿章廻息などを奏せしとふ上りし世の風俗といふなり

いとやさしくたうときるにあらざや今の世にハ法庭貴人屋ん
ことに[illegible]のうへへ雅楽を現びかまふことなく[illegible]
に妓えたまゐ唯三線浄瑠璃をもてお越びたまい賤き
妓めを家中に召て[illegible]をなさしむる乃えなしびまものの
女優を畜ひ置て[illegible]となく[illegible]とあ
めてこれをたのしきたまふあぐひをなめくまたり[illegible]
たうり[illegible]し　楽記に鄭衛の音ハ礼世の音なり桑間濮上の
音ハ亡国の音なりといへるハ淫楽に世をこゝぐり国をろろぼす
そこ理あるをいへるなり今此世の妓楽三線浄瑠璃古の鄭衛

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

桑間濮上の淫聲まもるゝなんと我も思ふ昔は如くの俗樂なり
りしなり夫化の當れもそなめ（趣の程）女までも雅樂をなりし
則れり今はいふくの俗乖なりなり屋んぞ我を人こゝこれを
好みて雅樂をなるふことなし雅樂は俗に老をく淫樂は俗に近き
なるゝ孝經に風を移し俗を易ふは樂なり善きはなしといふ
屋り悪き風俗をうつしかへて善くするは雅樂乃切なり善き
風俗をうつしかへて悪くするは淫乖の力なり雅樂にして風俗をよ
くするは其効をそく淫樂にて風俗をあしくするは其ゆへ
しされは縱雅樂世に行はれても淫樂を林ふせざれば雅樂すれ

屋をし孔子の鄭聲をさまたてとのゝまひし代なり今の世
には雅樂たえてなくして淫樂のゝ樂なる故に士民の風俗をた
ひてあしくなりくだるゝ走る馬の如けはしき坂をくだるが如し貞
享よりえ祿の初までの人の風俗思ひ出して今の人のありさまを
みるまゝ衣冠せる人の偶みなく赤裸なる人をみるがごとし六十年
のうちにかくだるの變化なるはいかなるこそや全く是淫樂のなす
所なり三線淨瑠璃はもとより淫聲にて百年このうちの物なるまゝども
貞享のこゝ家までは三線も今のぬくのぬくにあらず淨瑠璃も皆昔
物にて詞やさしかりしに是は其筆に上をあまりに出来て家お

廿八

とらじと巧をきそふほどにさぬぐの妙ぬを作り出しく人の強
を恨しむ淨瑠璃も俗に近き鄙俚根褻なるをかたるほどに
今に至りては詞きはめていやしく淫聲いやまさりておそんあるへは
きくに思ひがたく可を掩ふ見を面白く思ひてたのしも淺はしき
世の風俗なり昔なきかやうの事の出きたるは誠に國家の大なる
病なりの甚しきはあるべからぬたとひ遽に棘に止せずとも三線淨瑠
璃をば非人の流化に定て座敷によらぬ者とせは士君子もおの
づからこれをもてあそぶさるべし是風俗をたゞしくする一ツのそとん
胡ろといふ物は三線の為ばかりなれども生ひざ雖にいやしげなる故

にやぬむ者すくなく只いめくら法師非人の流化にて座をぬまば
風俗を敗るほどの事なし ○ 箏はもと樂器にて管絃にのこ
入しにいつの比よりありけん一二百年の昔公家の人筑紫に流さ
れて配流の法まぐに箏のことを起きうへて始けにし種樂の越天
樂の影を近くふし越ながらして是に箏をあつらせて起られ
しを筑後國善尊寺の僧その世をなしひつて屈して世に弘め
しより筑紫に箏と名づけて世のもてあそびとなまりとうや千段
八橋の指校といふめくら法師此世を習ひて雖に上手なりしかは
越て樂の影のふきといふも其の名といふ影を本としていろくの影

廿九

を誰人にか假て人をと名づけてさまくの世析をあしらるより
いよく世に仍ゆきて貴賤のもてあそびとなまりしきたり雅樂ゆ
ハ手のこまかに形く一たびにかつ乃弦をかきあらしそを筑紫ゆ
一ツ二ツの弦を鳴し記くもこまかに あゆきなかに世俗の可に一面白くさく
本樂器なきとも あゆきなかに深じ汎部なるといふことをすれば雅器も
淫部を出ると琴(キン)瑟(シツ)といへども我なり越て樂の影ハ雅音なるをの
べて筑紫筝の影とあせば淫部なり志うまで影の詞程度さしくてよ
子ひんぎの中にても醜にくうしび位ある人の前にてハやしうしび婦
女の中にもてあそびてハ淫奢をすしもむるまぐくの害えなし三線を

記きて淨瑠璃をかたるにくしぶきハたるうにまさまり俗中にて絵歌
のもてあそび昔ハ唯是のこなりしといふにそ書ハ紀人ハ是をこのま
祢ば増えいやしき者ハそかたはらにあてハきうんともせずに江戸の関をも
祢もまた阿里きてハ筝の音を法めにきるぞ只三線の音のこ漸にうちて
かまびましきれば めくら法師にハ瞽女にハ筝ハ乞くこの今ハ百人に
一人なり風俗の衰て いやしくなるれこのたぐひなり○樣樂といふ
ハ玄惠法師がかけるといふ座割往来に入れ出れば猫金の小條家
の時より有しとアんゆきとも いうなる戯なりしといふと詳なれば
今の世の樣樂ハ室町の時より始まりとうや竹田の人ハ新秦嘉勝と

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

といふ者は戯をなし始りると云ふ嘉勝ハ今の猿楽師の今
まで大夫かたん祖なり室町の公方鹿園院殿より武家にて天
下を治なまふに古より有きてまゐる公家の猿楽を捨てかゝに猿
楽を作る事猿ハ今川左京大夫氏親小笠原兵庫助長秀伊
勢武藏守清忠三人命を受くこれを議定す楽ハ即猿楽ん
それよりこのうてこの世にあるまで是を武家の猿楽として敢て改め
ず武家の猿ハ皆此国の俗猿なり猿楽ハ俗楽なり猿楽の音ハ然る
歌なり鼓うつ者の口を張くさけぶも然るさ事なり孔子信ゆし
小鄙殺伐の歌といふもの是なるん今の武士こゝだらくる衣服を見ん

てる是をゆくに臀腿を露し肩をたり胴目を捧ていらぬ
しくふるまふにらくかなへる俗楽なり但猿楽ハ淫歌なき
故に人のんをとゝ うさぎ是のこと他の俗楽に縛まり志られども
猿楽ハ死せる者の幽霊あらはれて僧にあひてともらひを
うけ罪業を滅し佛果を得るに我多く作まり幽霊あら
ざれども有りて仏是を家とする根なる故に世のたらなきるを
志ゆんして人に菩提をまとむふ故なきハまくなし是を作
まる人有りハ仏志なる故なり武家に猿楽を張ぶハ此のる
ゆくさもあるべきが吉事の宴客にこれをもちふるんなるがこし 河

卅一

をまたむるに法きて生詞のまゝるよかふへる一ふしをうゝふハ賓主
の情をのぶるわざなれば中昇の古人詩を賦せしに類すべし猿楽
をなす者ハ幽霊のあらわれてとむらいをうくるさ陳又ハ世の常ゆを知
するなどをうなくかなしきなりをうゝひまひてたりゆるをゑわしともお
もはず只能を敎まてちやしゐてまひかなづるを目出てきことゝのゝ
おもひて舞いまわしきてんづるざるハたちうなるとなら湊の指按とい
ひし名へくゝ法師雅楽をこのみしが者ハ此ゆ我いひてゑゝひあへり
又武家の貴人猿楽のうゝひものをなゝひて一ふしをうゝふまゝ
でせめてのゆゑなり生活化を学びて猿楽師とうちまじりていろく

のゆゑをなしてまひかなでものまるハ貴無き事とおもわれ貴イ
國まて後唐の莊宗といひし天子能優をこのゝてみつゝそ活化
をなしてたのしまれしがわとなく天下を失われしゆゑ六代史にえ
とり能位ハ今の世の狂言なり土君子の恥無き事ゆゑ首平和國
の白拍子を好まれしも妓王妓女仏などいふ白拍子を召くまゝ勢し
のゝなり宮めなどこれをなゝいせるにあらず強食の相模入道が
田楽このゝしもゝ所うゝその活化をゆるひしるにハあらず今の世にやんど
なき人ことも猿楽を好むわどにてハ恥ゝしがうゝその活化をなして
楽ゝとは昔の人に賢なり風俗の下まゝ此しき世のありさまなり

卅二

前代舞事本紀といふ書は大成經ともいふ近き世の志れものありて
聖徳太子の舞事本紀の名を竊らく偽作せるなり近き世に出
来たるなどもを皆古よりあるさ為に書なせり此事に猿楽も
神代に猿女といふ者より始まり聖徳太子の時三十六番の猿楽
あり白翁黒翁といふ者あり指打の鼓二ツあり只鼓弾鼓といふ
などあらぬ事を出来るせり大事詐にて世を迷ふといふと見えたり
かやうの書をつくて猿楽は法古より此國に伝るとぞ其もいづ大なる
感なり事教の春日の祭にいつの比よりか猿楽をなし閑裏にても
近き世には猿楽を語説あるはいかなる故なるらん眸き本人は得志らぬ

とあり世に古を好む人まれなる故にかやうの事にも心づかず流
俗に志るこがひてまぢなきことをもよしとおもひて生まれにけるなる
なるべし　人生れて赤子の時は啼て聲を出す二三歳より
聲を揚らく叫呼す四五歳より人おしへざれどもいつとなく歌
謡をまねびてかたことなる童謡をとなへ乃ち志る只自然ん
人と志らくは聲を出して湮撃を宣るはじなくてあらまぬ故なり
されば人は何にてもか聲をこゝるはじをたりくなさでかなはぬ
性なりよろこゝるはいかるかなしむるたのしむるにはきそれ
くに聲をたつるはやむことをはぶるはざなり眸き者のカはじにも聲

卅三

をたてゝたけむハ君のおもなりそれをとゝまゝに捨置ぬまゝがあらむ
鄙俗にありもてゆきてたゝては淫聲のひしらぬことにあの我方の
聖人何ゝかじ知志得しめして楽といふことを作り置くこゝひ
まひ綠竹鼓の拍子にてんをあぐさゝん漢撰とてこゝもまゝ多る心氣を
宣揚發越せしめたまふ異國の事ハ志ばらく置て本國の古に催
る事といふハ馬子のるをたふにこゝ所謂あるをたゞあげて是を綠竹にあも
せて朝廷の神事にも御遊にもちひらる是本國のうゝひそのゝ始
ありとうや賢人が古作の日記にかゝるふなゝ是の歌に
素の曙にてゞ祢をばあくつかまつきにてゝをきあく法むるなを

たゞまゝるゝん志らとゝんやくふらんかへゝやよむ所のら歌ぬも
うちぜにこゝむそゝゝどをしてをき乃りまげをして鉢ももてこゝを
のれたにこぜ　といふ所が如き音を眺き者の歌を詞やさしく
きゝにてかゝぐそれよりのちハ朗詠ありて雲のうへ人の九の志を為り
又是ハ今根といふことあこりてさうもりあどの奥を催し口ゝに是
もいふとあくとなへうしなへて今の世にハ詠のゝ意あくなまり
白拍子の歌の詞を平家物語などにかのこれり是も詞屋さしく
きゝにくのしれ理理法師の平家物語ハ天台の聲明のふしを
らけして生佛といふめくゝ法師をのりまゝまつきの聲にふ

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

てかたり始るといふ今の世まで法たいまり詞いこんより平家物
語なきはいふに及ばぬふしも昔の習ひなきはきたにくかたす琵琶
をあとすきばたゞ歌も淫ましぎもてあそぶ人に損なし謡食の時
の田楽にはいうあるらしひものう宵ひん今知まる者なしそ
れよりしりては猿楽あり無き世に昔の名の舞といふこの
室町の末とうや桃井氏の子孫に比叡の山見とて世の磨と
いふ者まひ始るといひ傳ふ琵琶法師の物語に似たる事もあ
り猿楽のうしひに似たる事もありいづれもあれかも淫事
ふきこのなり舞といへど起てまふことはふく只扇にてくるをうち

拍子をとるのこなり詞は定まりたる事あり皆昔物語を演
たり新きるをば作り出さず土大夫の中にもてあそびて淫佚を動
むる思なし寛文延宝の比までは諸侯貴人の家客にも是を
用てんをあぐさめ酒をも進めるに元祿の比より猿楽集にあり
て世の此まひ世にまたまゝあり説經といふものは本法師の中に説
經師といふ者ありて佛法のたふとき事どこ我詞に繰り浮世の
無常の哀に出し祖昔物語を演りて善悪因果のむくひある
るどもを物語に作りて是にふしにくりて哀なるやうにかたりなし
鉦鼓を鳴して拍子とり世の婦女にきかせて悪をいましめ善をすゝめ

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

りうこふ影も只さいがしくいやしくかしましき乃こゑあらく昔の根
なる屋さしきは家はかりもきこえまて家等う一生の内六十年のつる
に俗楽さへかくいやしくなりくぐまるいそこいうあるるすぞや浄瑠
珠は江戸し京難波のことにあしぐれ土を囲のいふうにこそ江戸の風ありて
一ふしかりうることさ聞くなりそ中に江戸の浄瑠珠は本より武
家の好こにあり勢こるなに親もふしこもいさゑんに根にて法にみあ
り京難波の浄瑠珠は都らかなしくふるひてよそげおかしさり
あづこえ縁なり此方は何才乃浄瑠珠も皆昔物語なるもしかどに
親がこさのこいなしかこさりきそこはいたゞ今の世の新をかたり出

せるなに親を祈ばいやしくなりぬまば都らもふしこ法まていや
しく浦ましくなれりされども土地の風俗おなじかゝ祈ば江戸
の人京難波の浄瑠珠を吹こるは耶をそむけ耳をおそひてき
く屋きるこせぎりしに寛永の法京より一中といふ浄瑠珠
師に来りて京此浄瑠珠を弘めしより江戸の人屋に見をよ
ろこび阿へりしに享保の初に又難波より竹本といふ浄瑠珠師来
りて難波の浄瑠珠を弘むしより江戸の人貴も賤きも難波
波の浄瑠珠をぬこまあへりしに此後に又都諏といふ浄瑠珠師難
波より来りてかなしき都にていやしき諺の浦ましくとりみどし

卅七

たるなれども世を譏り出すほどならねば江戸の人又はまさらぬ事とく異し
もてあそぶ程なし。下ざまの人は京に及ばず。諸芸昔人思ふのこと
あるや。されど其人ともまして是を好みて宗采の称をもいふ
る者輩ありて目出たきありさましてあつまり座敷にても京
に出し紀藝のそらごとはしきたるどもを譏り法にくるをわらひしと
さて其後とてもおもはく目を尊びし程を明してあらず強く好みけり
浄瑠璃師とかく法師などのかたちを聴くさま法ましとみるに士
君子のさまをいやしからぬ人とも此ふし読みひろくされ其のある心を
たゞ何もなく声うちあげて語る者有りとおもはゞ世のおよびては

江戸の人ハ京難波の浄瑠璃の口をよろこびて江戸の浄瑠
璃をばまことにいやしむべき物也。然るに世の風俗ハ此の如く悪にすゝみて移り
かはる物なれども三十年の間に江戸の人乃まで絶たる也。
是のめぐるにかはるは他の故にあらず。是全く淫楽の力なり。鄭
楽の風俗を善くするよりも淫楽の風俗を悪くするは甚だ声
る也。速なり。和漢古今の俗楽中にも今の三線浄瑠璃などの淫楽
ほどあるべしとおもはれば世の末とはいひながら浅ましく悲しき風俗なり
かし ○漢にていふ俳優ハ今本国の狂言師なり。戯言をい
ひて人をわらはするを俳といふ。優はすなはち狂言師なり。俳優侏儒

といふハ人の名此たけ短きを侏儒といふたけひくきものハものまねし
てまいをどる事よき故に俳優ハ多く侏儒なり昔春秋の世に魯の
定公と齊の景公と夾谷といふ所にて會盟せられしに孔子魯
の大司寇の官なりしが定公の為に相と成りて行たまふ此所にて宴饗
のついでに齊の方より俳優侏儒を出して戯舞をなさしめし
かば孔子其あしきを咎めたまひて先王の法に匹夫熒侯をまどハすものハ
罪殺すべしとて右の司馬に命じてきらしめたまひき聖人のい
ましめ後世かくまでハあるべからず優旃優孟などいひし者皆此たぐ
いなり唐の代にも梨園の楽工といふ者まゐりて俳優なり宋元の代より

雜劇といふ事ありまゐりて俳優の所作なり雜劇ハ全く此方の今の狂
言なり戯子といふもの此方の野郎役者なり雜劇の所を勾欄といふ亦戯
場ともいふ此方芝居の事なり雜劇をする所を棚屋といふ此方の桟敷なり今
の操芝居も本中華の雜劇にならひたるといへり中華の雜劇には國家の法
禁ありて男女淫奔などの事ハ何ニても世の風俗に害あるものを書き出さ
ず唯忠臣孝子義夫節婦などの風俗を化すべき事をなさしむる
此おきてに背く者あれば刑罰を行ふ是國家の法なり今我國には此制
禁なきゆへ戯子も男女の色に耽り淫を示すのみにもあらず
或ハ淫奔して名ヲ失ひ家をほろぼし或者のミをまね給ふもありて淫佚を

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号 本別12-34　ガラス使用

動むることをあすよしなり男女のけき者はゆゑおよびに年たる者もこ
れをみたくは面白きるの跡とおもひ妻子を引ぐして志ぶく戯場に遊ぶれ
どよおさまき者も首よりはつよく智恵つきてよかゝぬるをかしてくなり
ものいひたちねふるまひよりはあかゝちゆのよ持ゆひ衣服調度までもじ
く聖臣役者をまの称びかりそゆゑよりあひする物語するも戯場の
おかしかりしこと我いひ聖臣役者の名を指らくそれはかりとあり僅はとあ
りてといひておのゝんよよしとおもふをゆゑんあしとおもふをそ志まびへこを
きさらいありて半ぶひに年ふれどよはは然をおこして親あらくなり
龍うちあゆん女なりどはいきまれてまゝるとなきまゝるもあり賤き者のこかく

あるに何ぞ土君士の不よき人にも此たりしひゝ人の風俗の日こに悪くん
くぶることむべなり又豪國にては土農工商のたゞしきことばを志て世をとる
ゆゑ者を平民といひ戯子の類をば都て楽人とゆづけて平民の数にいまぞ
人のみなる者とし種類をつけてことのゆゑにいやしゆんきこゝふこと家國乃
稼多乃されば平民の多き者も子を楽人とあまことを以て楽人より
平民に入ることかゝるゆゑ平民と楽人と婚姻を通ぜず皆國郡の大林ふん
これを犯せば刑罰あり平民と楽人と種を混ぜ志むまじき事也家
國にても聖臣役者は本稼多の部類にさぶゆんおうるとも世の人かれ
ゝ伎藝をあてまるんよりかまこゝを迎つくることを恥とせずかまこゝ家

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

動むることぞをあすよしなり男女のけき者はいふまおよびぞ年たる者もこ
れをみるくは面白きるの姫とおもひ妻子をしらぐして志ぞく戯場に遊ぶれ
どにおさふき者も首よりはつよく智恵つきてよかしぬるをかしてくなり
ものいひたちぬふるまひよりはめかしちゐのよ持ゐひ衣服調度までもぐ
く聖臣役者をまね稼びかりそゐんよりあひ立る物語するにも戯場の
おらしかりしこと我いひ聖臣役者の名を指らくそれはかりとあり僅はとあ
りてといひておのうんによしこおもふをそゐんあしこおもふをそ志まぐ人こを
きさらいありて半ぶひに年ふれどにはしは恐をおこして親あらくなり
龍うちあるん女なにはいきまれてまたまなきまるもあり賤き者のこかく

あるにはしらぐ土君土の不よき人にも此た日ひ多し人の風俗の日こに悪くん
くぐることむべなり又堂國にては土農工商のたぐしきことぞを志て世をとる
ふ者を平民といひ戯子の類をば都て楽人とのづけて平民の数にいまぞ
人のみなる者とし種類をつけてことのゐらにいやしゐんきしふこと家國乃
稼多乃されば平民の多き者も子を楽人とあまことを得ず楽人より
平民に入ることもあるにぞ平民と楽人と婚姻を通ぜず皆國家の大禁ふん
これを犯せば刑罰あり平民と楽人と種を混ぜ志むまじき為也家
國にても聖臣役者は本稼多の部類にさぐゐんおうるとも世の人かれ
う伎藝をあそまるんよりかましらを迎つくることを恥とせずかましらぬ

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用

富ミ都のうちによき住居し美服をきるのみあらば倍俐にて歌よみ
詩つくり学問する者さへあるときけれは増ゝ世間のあらゆる事何味かん
何かはなからん人の機嫌を知り人のんよいると極ゝ加しこれは君の人
これにあひてはかけぎるをさるとなりされば川とあく彼ともがらに位つきて
土君子ゐもまじはまば眺き者と志りあがら土君子もはいなきをとり
ゐは都の内にゐ光地もとめてあ起ゐはなどして平民となるを多し諸侯に
めされて侍祿たまはり土となるもありんかるんこれをみ居ては長太息を
べし國家の法様ふゆる紀家に非人を以て人類に混ぎる誅に痛まいき
世のありさまふり土をこさるはいふに及ばず百年の前まではかゝるはなりし

京山曰
延宝八
年改元
天和より
五十年は
享保
十四年
にあたる
矣書
享保
の末の
作こ
京山再
按に
書是
先生は延宝八年の生れ十八年にて延享四年没せり

卅一

少しある紀人は屬り　家父は實に水の中ごろに生まれて八十八年にる
○享保乃中ごろに終まり　大猷院殿　光家有院殿の治世を歷て此
時の事を考に語りつまばこれ[illegible]きよりしるゝ事ゝ耳に熟せり家は
延宝の終の年に生まれて常憲院殿の治世より末のかたはまたしく
此事ゐに歷つまば童稚の時より只まで六十餘年の事をば目にみんたり
父の語り聞せつることゝつがまのあたりみつるを思ひつゞれば百年の世
愛歷ことして目の前に在るがぬし人と物語する法いぞには昔のるども
いひ出しゝ或はこしひ或はなげき且はおさまれる治世に生まれて于
戈のくるしきを知しず　やめく寢ね乞げかにおきてゝ嘯き歌ひて明し

蒼まことをよろこぶ旦ハ常ありし時よりいつぐまして猛虎も鼠となり寶
劔も鉄となることをいさどをるかゝて此世の治まるを久しきに依て上
より下までんゆるゝて知らまゝ鉄楽のことをいとなむ故に番きるハ
たゞしかしびなりて新きるをめづらしともてはやすなどに人の親身のさ
より始て衣服黒あ[ヤヅ]くりまぐ昔よかりぬまゞまして人間種々の儀
式遊宴の為のしゝなどあらゝしきるども年とに出きたりて番き
るハいけと形くまゝまゝ大うゝ番き事ゐるよきことおゐく新き
るにはよきるすくなし風俗のうつりかゝるを目のあるに應ぜらるゝ
○中に昔と今と宴と異のぞくかはまゝるさへあやしとゐるゐ冠を服に

服を冠にさゝやゝあるゝしを不思議なまゝ法くぐと百年て
のうちの風俗をおもひくらぶるに餘流の事をば覺えて知るの人の風俗
こそ雅に昔にかゝりたれ已がしたしき者の中しに其に長元和のし後生
れたるもの男にも女にも五て寛永のころを年の終にて強たりと云に
男ハ冬韋[草]のうちうけ韋[草]の袴を美邦とし女ハ此ふの韋[草]の襦子をたゝ
我に相ひと帰りといふその襦子ハワがおさなき時までものこりて有し形り
婦女の帯ハ金襴を美麗の服とし黒地に梅櫻松をとこ織ぐに織つ
けて是を鉢の木の帯と名づけて弥重しより廣さ僅に鯨尺の二寸ぞ
うり紙をんとして絲などいることなし四月より八月まで婦女の襟

卅二

服
卵に錦にて廣さ鯨ひ人の八分だけなるをうしろ結くたるを紙法は常
といふ今のつけ帯は昔の常の帯よりも廣し今の人は昔の事をかれ
ぞうごとのことおもひて家伝とせず此等はワがまのなりしるゆゑく
詔に阿ゝれ手向きる知りる人あらば易とふ雖し都て男女の衣服
昔は極て質素なり其男子も女子も十四五歳までは長き袖を着る
に昔は鯨ひ人乃一ヲ人七八寸を極とせしに貞享のころより二ヲ人だけに
なりそれよりようやくむくむくなりて近きころは二ヲ人四五寸になりぬ
とみ而婦女の帯も貞享元祿のこ家よりやうやく廣くなりて今は
鯨ひ人にて八九寸におよべり綿をんとして褥乃とし男の肩衣とふ

物昔は麻の幅鯨ひ人の八寸だけなりしに貞享元祿のころより幅
一ヲ人におよへり實に水のしろまでは婦女細き麻縄にて髪を束(ツカネ)こく生上
を黒き絹にて束しにそは麻縄をや絹にて紙にてゆふ越前國より粉紙
にくもとゆひがことといふ物を造り出して海内の婦女とふこれをもちふ
それより絹にてまくことも屋こゝ奴家父まのさしくこれをゑんとかたりき
今世間今此人皆ては伝と等ばでおよ我男女の髪かたち家等ぶみまよ
びたくよりしのうたも幾かはりかたつくん今は昔のかたちも乃こしぶ昔の
婦人は髪おほく長きをたけにあまるなどいひてゐとめたるしに近
きしろは髪をしくなき短きをよしとする風俗になりて髪花

卅三

ひき女は髻の肉をあるひはきりあるひはそりてさくなくせ此風俗は京
の姫女よりうつりきたりまゐり此る頃ゝ都ゝ男女の風俗おとむづら
ひ物の名まで通きころは京に似ることを多し京は公家の外工道商佐の
こゝあれは人の心柔懦にて利にかしこし江戸は武家の都なれば人あづま
ふぞ此人粗暴なれど利にうとし志ろ法は三十年おのうへは江戸の人
京の風俗をまゝ稱ぶ故に武士乃人も昔にかはれり唯京の姫女の昔
より蒙衣するのこしそいまぐ江戸にうつらる江戸の姫女外に出る
昔はきまゝとて黒き絹にて頭面を法くみ目だけをあらはし見るがたは
綿ゐて頭面をつゝしは是ぞ二十あまり寅永乃おろまでさうなりきら

はちいさきさて紙頭にはいてきたるのこゝにて面をばうちさゝしきやや
うなるかゝにてそこをゆくさ後たゝもたゆげにもつんえぎ男は面をあらはし
屋きものなるに此ころはあゝしかさの肩の上まぐかゝ法をかぶるはめづらし
かゝぎ曹の少くなる帽子をかゝるもて面をかくすもなり其の頭巾に覆
面のめくなる物をつゞりも法けて目だけをあらはしてそこをゆくもあり
昔の女のごとしもとめを志のぶものゝ多くなりたるにや又此比の男は小袖の
裏を紅にし或は紅のたゞぎきぬを袖口長にして腕をまくふだけるに
しめまるものゝ多くつんゆ女はかへりて縹の裏白き裏などを見るめ
りおもしは男女雲をかゝにいふ所し又昔は士君子にて学問し歌にも

猶志ろ形りましてそれより下つかたの様をたゞして十二十人の
従志をめしはしまるだられの人はいよく分形を志りて身のほども
りをもきさげてよ後が程便るへしとおもふにさはなくて今をと
きたおこが海しく家より上にまゝ人をなきやうにそこをふくぎてく
ゆくさまゆんぐるしとそいふたゝまゝ形し此風俗もつがいとけなかるも
し時におもひくしぐまゝ世やけくめさ海しくゆん所都て昔は徳長
貴人も多くは恭敬にして禮を深く志を眺き者にもたぢろくたしと
おきふるまひを甚悪る人を臣下に禮をあつくしおとだつかひま
でそうやくしかりしと家又かゝまり今おほかゝ此風もなくな

り奴又昔は土君子の婚取めに財幣をもとむることなりしに今は
一郡をも領するほどの人さへ財幣をもとむることなりぬれは下ざ
海の人はいふまやおよぶ世の治まることは人しれによりて人をも供楽し
て過ぎて後は有祿の士より上つかた國郡のあるじまでこの郡に貧
困してたゞ高佐をたのみて内郡の事をいとなむなり位ある人
も高佐をおそれらやまふこと思しければ高佐はおまゝに無て土大夫
をも恒志めあなとなしとも昔にかはまる風俗なりかくだらりの貧窮
にてもみに出ゝく知らぬ者此中にはたこが海しきふるまひまする
おうしとも思はまぎ中華の人法吾は男も女も婦なるこれし又

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

刑におよぶぬるとの煙花罷乃昔をば髡刑とうく頭髮をそりけり仏
法ひろりてより男女髮を剃ゝく僧尼となるを何り僧尼の外に
尚の人鬢髮をそるをなりしに近き世に韃靼のゑびす國をうばい
て天下の人をおとゞく王國の風俗にして頭髮をそり髻此家をあの
こし組ゝもくたれて牛の尾のぬくあるを辮髮といふ是中華の風俗の
大変なり家國も昔は中華のぬく僧尼の外に髮そるをなりすし
にいれのしろよりか武士中に月志衛とて頂乃髮をそるしに後は鬢を
もそりおとし額に角をゑゝく頭髮をも望るて項の邊までそりおとし
髻をは指のふとさにしに生来を剪すてゝ鶴の尾などのぬくあり家の

人はいまゞ髮をばそゝ祢どもおまも武家をまゝ祢びて鬢をそり武家も
昔は烏帽子直垂を着たりしに今はそれも屋ゝぬきば只月志ろをき
とて少の髮をうしろに法ゝ曲るさ屋昔の大きゝにそ何ゝ何と
名づけん格もあし韃靼乃ゑびすは髮をのこせるに此方の人はゑげをさへ
そりおとし ぬきば鉄髮の風俗ぬきよりも悪しといふ無し近きころ
は又うしろの髻の内をもそりてゐるいよく髮我さてくなりす志ろのゝる
しば女も髮乃気のくもきをきしひろく頭髮の内をまろくそりて髮を
おそくし髮の末を剪てゝしゞうす是も大に昔にかはまゝ悪風俗
あり前此まゝにて年を經はいれとあく女は今の男のぬくゐもなり男

卅七

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34　ガラス使用

別12
34

喜壽者延宝八年の生れまして
延享四年六十八歳にして没せる
共書ハ古子保の来の作なるべし

再按に先哲叢談巻六に
春臺先生の傳あり云
「春臺庶子義子零替不修祭寛政
八年値五十年忌辰書商蒿山房陳
菲薦祭墓為建一片小石于墓碣下以
紀其浴恩事墓在江戸谷中天眼寺之側」
共文政施と云ハ先生の没年ハ寛延元年あり
時年六十八

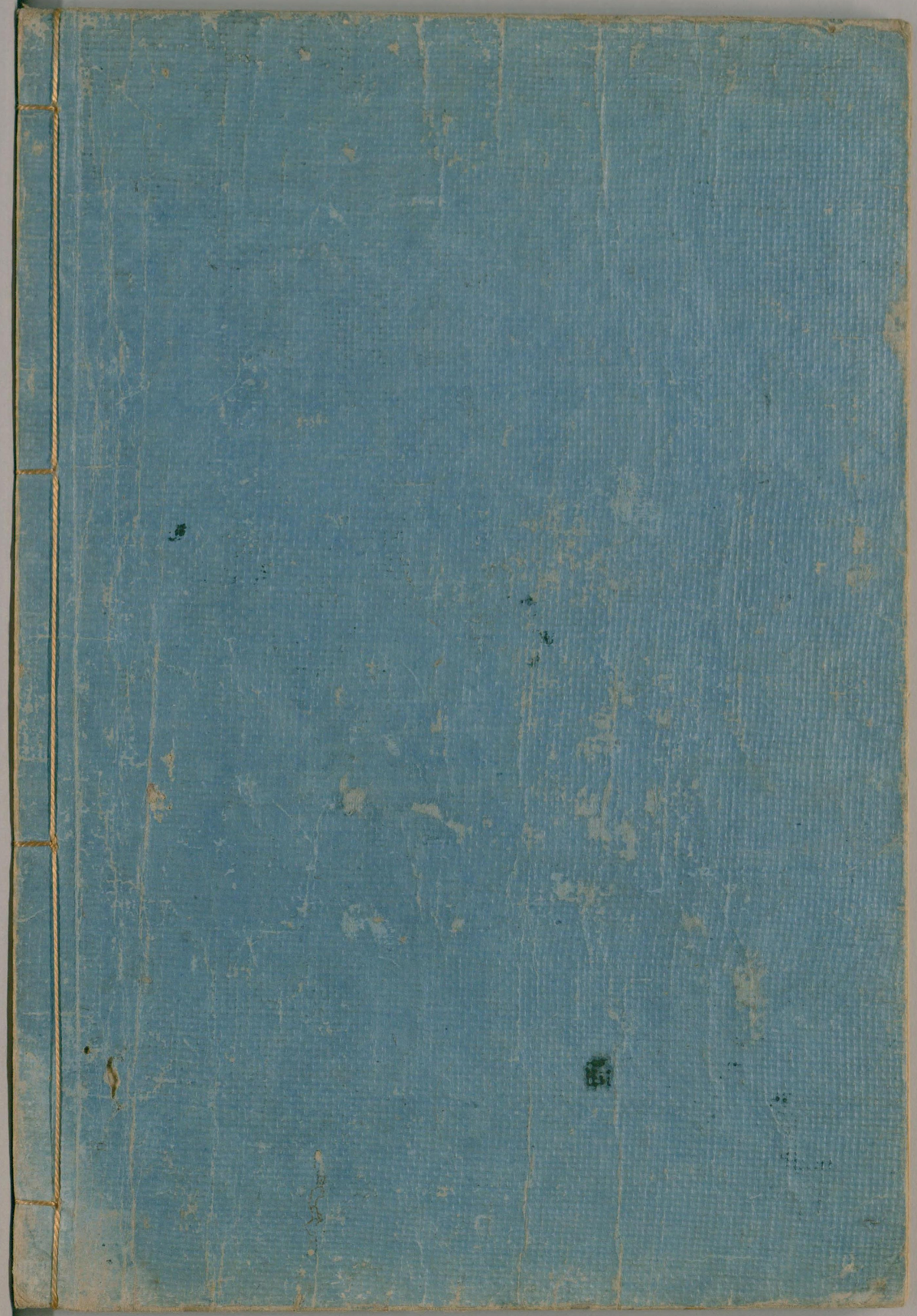
以細井貞雄藏本書写年
文化十三年丙子六月五日

[redacted]

醒

好文堂

国立国会図書館　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『独語』　請求記号　本別12-34

ガラス使用